

教育における美の研究

— J.ラカンの精神分析理論を手がかりとして—

専攻 学校教育学 コース 教育コミュニケーション
学籍番号 M07011G 氏名 西本好男

I. 問題設定

現在の日本の美術教育は、美術を通じた人間形成を目的としている。では、その人間形成とはどのような人物像を理想とし、どんな思想を後ろ盾にしているのだろうか。戦後の日本の美術教育に大きな影響を与えてきた二つの民間美術教育運動からみれば、一つは、人間に生得の創造力と個性を伸張するために、抑圧から解放され、内的世界に矛盾や葛藤を来たさない心理学的に調和と正常化がなされた人間の形成である。それは、あらかじめ設定されている心理学的な道徳や倫理を後ろ盾にしている。二つめは、よりよい社会の実現のために、有用な知識と技術を修得し、社会認識の力を育み、社会的に主体化された人間の形成である。それは、あらかじめ設定されている社会的な道徳や倫理を後ろ盾にしている。しかし、日本の美術教育が、これらの、あらかじめ設定されている道徳的・倫理的次元を後ろ盾にするのなら、その次元が、本当に信用に値し、尺度として役立つものであるのかが問われる必要があるだろう。

美術教育の核心は美(的経験)である。ラカンによれば、美(的経験)は、現在の日本の美術教育の依拠する心理学的な、あるいは社会的な道徳や倫理では決して捉えられない次元にあり、美(的経験)とは、真の倫理的次元とされる<死の欲動>との関係から捉えられなければならない。<死の欲動>とは、人間に自我が生成される以前に経験した自他未分の全能感の記憶と、排除と抑圧による死から生成した攻撃性と破壊性の記憶に戻ろうとすることである。この欲動は、実現されるとき享楽と呼ばれ、私を制御する自我を失い、究極的な破壊と破滅を、私と、その周りの人間に招くことになる。そのため、<死の欲動>とは、人間が決して向かってはならない行程なのである。(図1参照。)

II. 論文構成

序章 本研究の課題

第一章 J.ラカンの略歴と精神分析理論の概略

第二章 J.ラカンの精神分析理論による美の考察

第三章 美術の考察

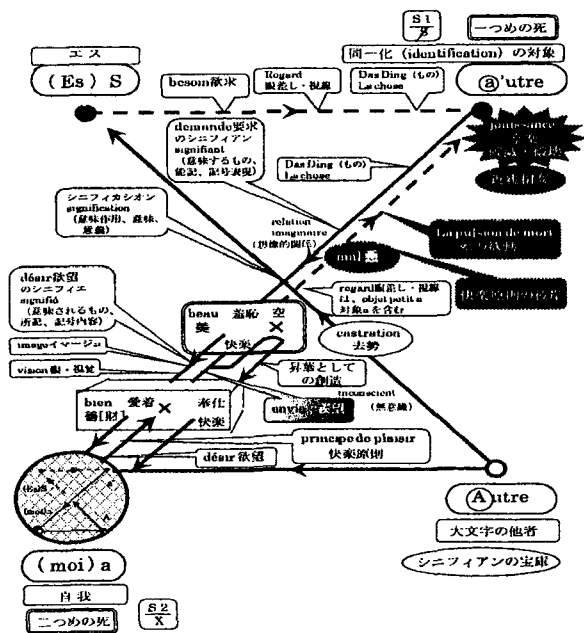
終章 美術と教育の考察

III. 論文の概要

第一章では、ラカンの思想を考察するために、ラカンの略歴と、ラカンの精神分析理論を概観した。ラカンの精神分析理論の最も重要な理論は、人間が言動する根底には、人間をそのように言動させる構造が存在するとしたことであり、その構造はシニフィアンの導入と連鎖によって構成されるとしたことだろう。シニフィアンとは、意味するもの、能記、記号表現とされる。第二章では、ラカンの精神分析理論による<死の欲動>と美の関係の考察を、ラカンの理論において重要な図となる図Lを用いて考察した。(以降、図①参照。) 図Lとは、シニフィアンの導入と連鎖によって人間の構造が構成される過程を表している。そして、その過程から、欲望とは、自我の生成のとき、自我化できなかったもの(対象a)を原因としており、欲動とは、対象aそのものを、その対象としていることを明らかにした。次に、ラカンが人間の<死の欲動>への障壁には、善と美があるとした理論を考察するために、まず、美の生成過程を考察した。美とは、眼差し[視線]を、自我の目が意味として捉え返したものであることを明らかにした。眼差し[視線]とは、自我が生成する以前の<もの>の領野で、<もの>に見られている状態である。次に、善[財]の生成過程を考察した。善[財]とは、自我理想を源泉にし、他者の欲望を叶えるために、他者から与えられた財産を分与し、その報酬として他者から財産を与えられる関係であることを明らかにした。次に、<死の欲動>と善[財]の関係を考察した。<死の欲動>とは、善[財]が越えられ、羨望に導かれ、最も重要な財産である私の存在が賭けられるとき現われ、その源泉は、善[財]の真の源泉でもある理想自我であることを明らかにした。次に<死の欲動>と美の関係を考察した。人間が善

[財]を越え、苦痛に陥り、羨望に導かれ、<死の欲動>へ向かうとき、自我は緩和され、自我の目も緩和される。そのとき、<もの>に見られている眼差し[視線]は顕現する。そして、欲動は対象aの一つである眼差し[視線]を捉えて動転し、欲望は、その原因を失うことになる。これが美による昇華である。そして、自我は<死の欲動>へ向かうことはできなくなる。次に、欲望は反転し、<もの>からの眼差し[視線]への応答として、<もの>を覆うイマージュとして、意味として対象を創造することになる。このとき、「無からの創造の意志、再出発の意志」として、意味を生成し、欲望を生成し、知を生成し、私の存在の創造が行われる。これが美による創造である。

図① <死の欲動> (la pulsion de mort) と美 (beau)



第三章では、美術の考察を行った。美の機能と同様の機能を持つ美術(絵画)の機能は、視の羨望と、視の欲動に導かれ、タッチという身振りを介して、自我と自我の目の機能を緩和させる。そのとき、対象aとしての眼差し[視線]は現れ、自我の欲動は動転し、自我の欲望は原因を失い、反転する。このとき、対象は、まず、意味を無効にされた<もの>となり、その<もの>への応答として、意味としての作品を創造することになる。また、自我の目の視覚においても無くなりたくない眼差し[視線]は、どんなものからでもやって来るため、絵は、どんな対象でも美にすることができる。この美術の行程は、

原初に、自我が生成した行程と同じ過程をたどり、自我の存在と、欲望と、自我の目と、知性が創造されることになる。この過程が、美術による昇華としての創造である。そして、美術の機能とは、一つめは、人間の決して向かってはならない<死の欲動>を制止することであり、二つめは、自我が生成したときの原初の姿の再生と、原初の減退のない人間の力の再生であり、三つめは、作品という意味の創造である。

IV. 結語

美術教育は、美術の核心である美(的経験)から捉えられるべきであるとして、ラカンの精神分析理論による美と美術の考察を行った。この美と美術の機能とは、人間の存在の根源に関わり、人間の生と死に関わっている。また、ラカンによる美と美術の機能の考察は、「人は美をいつ、どのように理解したのか」、という問いに答えるものであり、美(的経験)とは「何であり」、「何のためにあるのか」、「何のために必要なのか」という問いに答えるものであった。この美と美術の理論は、美術教育の理論に基礎・基盤を与えるものであると考える。

現在の日本の美術教育において美と美術の機能は十分に発揮されているとは言い難い。美と美術の機能はいかにして、教育と折り合いを付けられるのだろうか。欲望の世界と、要求の世界にまたがる美や美術は、誰かの欲望としての教育の領野を越えているのではないか。また、現在の教育の多くの問題点の一つは、この美や美術と、教育の次元の違いによって教育が美や美術を内包できないことにあるのではないか。しかし、この矛盾こそが、これからの教育を考えるときの着眼点であるとも考えられる。つまり、真の美や美術の機能を内包する教育とは、どのような教育になるのか。また、教育が美や美術の機能を内包できないのならば、教育を、美や美術の機能から捉えることはできないだろうか。現在の日本の教育を根源から考えるとき、美や美術と、教育の関係を考えていくことが重要な課題になるのではないかと考える。

主任指導教員 杉尾 宏
指導教員 大関 達也